

アクセスガイド



情報

- ラムサール条約と条約湿地(環境省)
<http://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/>
- 鹿島市役所
<http://www.city.saga-kashima.lg.jp/>
- 鹿島市観光ポータルサイト
<http://kashima-kankou.com/>

ラムサール条約湿地 肥前鹿島干潟ガイドブック

発行:環境省九州地方環境事務所 ©環境省2016

熊本県熊本市西区春日2-10-1 熊本地方合同庁舎B棟4F(〒860-0047)

九州地方環境事務所 ☎ 096-322-2400 Website: <http://kyushu.env.go.jp/>

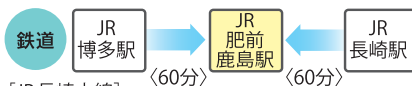
制作協力:鹿島市ラムサール条約推進室、まえうみ市民の会、永池守、樋口作二、峰松昭次郎

写真提供:七浦公民館、浜公民館、大塚清吾、木原清喬、中村安弘、中村さやか、藤井直紀、鹿島市

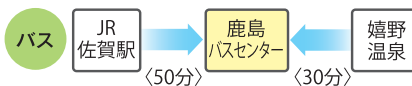
デザイン:MATCHBOX イラスト:中村さやか、松本悟



交通



[長崎自動車道]



鹿島市のマスコットキャラクター
「かし丸くん」



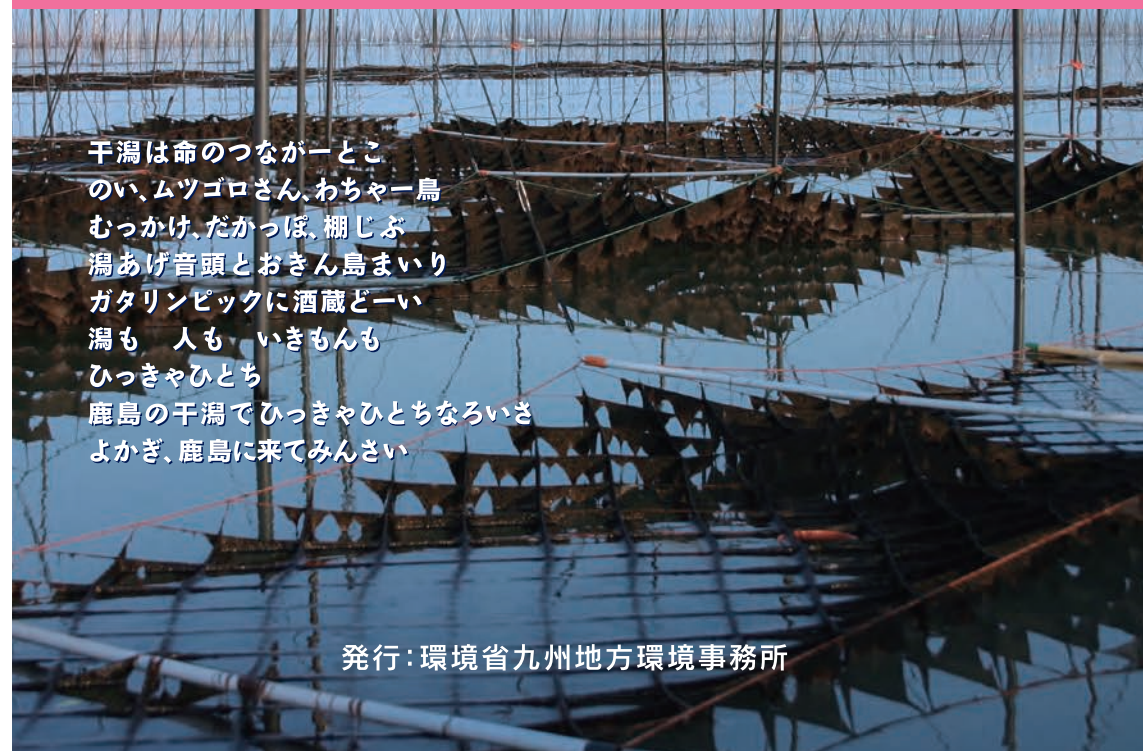
ラムサール条約湿地 佐賀県鹿島市

肥前鹿島干潟

肥前鹿島干潟ガイドブック



鹿島の海とともに暮らし、いのちあふれる干潟を未来へ



干潟は命のつながり
 のい、ムツゴロさん、わちゃー鳥
 むっかけ、だっば、棚じぶ
 潟あげ音頭とおきん島まいり
 ガタリンビックに酒蔵どーい
 潟も 人も いきもんも
 ひっきゃひとち
 鹿島の干潟でひっきゃひとちなろいさ
 よかぎ、鹿島に来てみんさい

発行:環境省九州地方環境事務所

肥前鹿島干潟の概要

有明海の宝物ー肥前鹿島干潟

有明海の反時計回りの潮流によって、東側の荒尾干潟などには河川から運ばれる大きな粒子の土砂で形成された干潟が発達し、北奥部から西側には細かな粒子の泥干潟が発達しています。有明海は約6mの国内最大の干満差によって、特有の生態系と沿岸域の暮らしと文化を育んできました。

肥前鹿島干潟は有明海の西部の最も狭く奥まったところに位置し、塩田川河口右岸から鹿島川河口左岸に発達した生物相の豊かな泥質の干潟です。干潮時には水際が見えなくなるほど沖合数キロメートルにわたって干潟が広がります。この干満と滞筋が作り出すダイナミックな泥の起伏の美しさは“有明海の原風景”として感動を与えてくれます。

▼ラムサール条約湿地 肥前鹿島干潟(57ha・斜線区域)



肥前鹿島干潟・見晴らし台

命あふれる泥干潟

肥前鹿島干潟の周辺には、塩田川、鹿島川の他にも石木津川、浜川などの河川が山間部から豊富な栄養分を干潟や海に運んでくれるため、多様な生きものたちがたくさん生息しています。代表的な種類だけでも、ムツゴロウ、トビハゼ、ワラスボ、ハゼクチ等の魚類。ウミタケ、アサリなどの貝類。シオマネキ、ヤマトオサガニなどのカニ類が豊富に生息し、それらを餌にするチュウシャクシギやハマシギ等のシギ・チドリ類やカモ類が多く飛来します。絶滅危惧種のツクシガモ、ズグロカモメ、クロツラヘラサギなども飛来し、国内有数の渡り鳥の中継地・越冬地となっています。

この豊かな干潟は古くから人の暮らしも支えてきました。この地域の漁業は大きな干満を知り尽くした先人の知恵が「むっかけ漁」や「たかっぼ漁」、「棚じぶ漁」など有明海固有の漁法を生み出し、豊かな漁業が営まれてきました。近年では日本有数の海苔養殖地となっています。また干潟を遊び場として着目した「鹿島ガタリンピック」は新しいワイズユースのスタイルを作り上げました。



空から肥前鹿島干潟周辺を望む(左より、浜川、石木津川、鹿島川、塩田川、廻里江川) ※満潮時

肥前鹿島干潟では豊かな生物と共生した人の営みが古くからあたりまえに行われてきたのです。

2015年5月に国指定鳥獣保護区特別保護地区に指定され、「国際的に重要な湿地」としてラムサール条約湿地として登録されました。干潟を守り、干潟^{なりわい}と共生してきたこの地域の人々の暮らしと生業が国際的に高い評価を受けたのです。

鹿島市とラムサール条約

鹿島市は佐賀県の西南部に位置し、東側に有明海が広がり、西は多良山系に囲まれ、山・川・里山・干潟と海が一带となった自然環境に恵まれた地域です。また海の長崎街道とも呼ばれる「多良街道」が通っていたため、肥前浜宿、鹿島宿は古くから物流や人の往来の要所として栄えていました。豊かな自然環境や地理的条件と共に生きた先人たちが残した歴史や伝統文化、建造物も数多く残っています。特に面浮立や獅子舞などの民俗芸能は親から子へ、子から孫へと脈々と受け継がれて、今日でも市内の多くの地域で地域独特の芸能や祭りが日常的に繰り広げられています。

鹿島市は人口約3万1千人の中堅都市です。海苔養殖を中心とした漁業や多良山系に連なる丘陵地でのみかん栽培が盛んです。伝統工芸や新しいものづくり企業の躍動もあります。また観光面では、年間280万人の参拝客が訪れる日本三大稻荷のひとつ祐徳稻荷神社。歴史的な家屋が建ち並ぶ「酒蔵通り」、「伝統的建造物保存地区」や「道の駅鹿島」などの人気スポットがあります。

鹿島市は肥前鹿島干潟のラムサール条約登録に先駆けて、2002年に新籠地先の干潟を、国際的に重要なシギ・チドリ類の渡来地として「東アジア・オーストラリア地域渡り性水鳥重要生息地ネットワーク」に参加し、国内でも先進的な渡り鳥の保護地域として、保全や啓発に取り組んできました。



チュウシャクシギの群れ

ラムサール条約と賢明な利用〈ワイズユース〉

ラムサール条約とは

1971年にイランの都市ラムサールで採択された、湿地の保全に関する条約で、正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」です。2016年3月現在、169ヵ国が参加し2,231カ所の湿地が登録されています。湿地環境の保全と賢明な利用を目的としています。「賢明な利用」とは、湿地がもたらす「恵み」を大切に受け取り、それを子や孫、次世代に受け継ぐことです。

日本は1980年に釧路湿原(北海道)を国内最初のラムサール条約湿地として、これまでに湖沼や湿原など50カ所の湿地が登録されています。そのうち「干潟」が含まれるのは、千葉県の谷津干潟、愛知県の藤前干潟、沖縄県の漫湖と与那覇湾、名蔵アンバル、そして有明海沿岸の熊本県の荒尾干潟、佐賀県の東よか干潟、肥前鹿島干潟です。

「肥前鹿島干潟」は2015年5月28日に「国際的に重要な湿地」としてラムサール条約湿地に登録されました。



ラムサール条約の理念

保 全

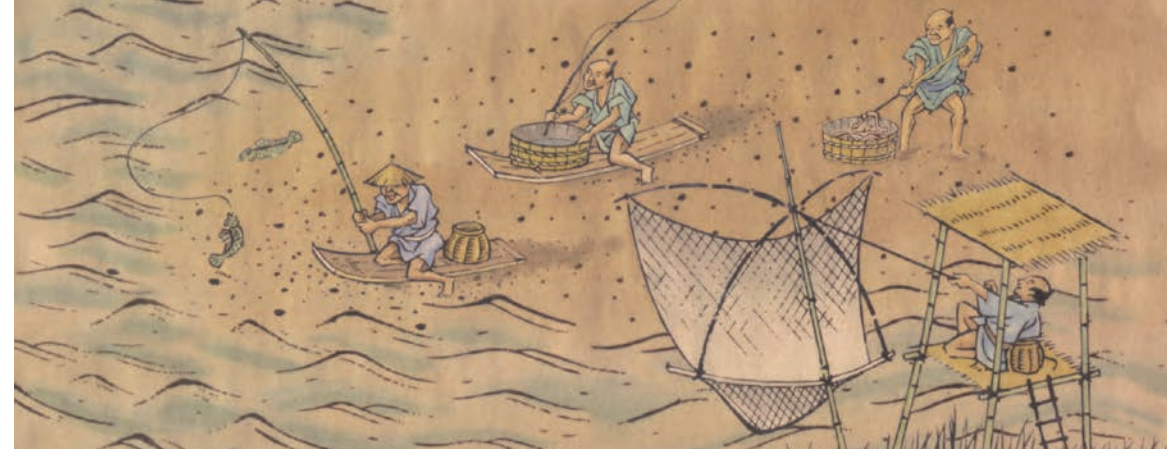
多くの生物や私たちの生活を支える重要な生態系として、幅広く湿地の保全を呼びかけています。

賢明な利用 (ワイズユース)

地域の人々の生業や生活とバランスのとれた保全を進めるために、湿地の「賢明な利用(Wise Use: ワイズユース)」を提唱しています。「賢明な利用」とは、湿地の生態系を維持しつつそこから得られる恵みを持続的に活用することです。

CEPA

湿地の保全や賢明な利用のために、対話(情報交換等)、能力養成、教育、参加、啓発活動(CEPA: Communication, Capacity Building, Education, Participation and Awareness)を進めることを大切にしています。



有明海の伝統漁

肥前鹿島干潟の国際的な重要性

〈登録湿地の概要〉

- 名称: 肥前鹿島干潟
(佐賀県鹿島市／登録面積57ha)
- 湿地の特徴: 佐賀県南部の有明海北西岸に位置し、河川の河口と海岸に発達する泥干潟である。湾奥部に位置するため、中央黒潮生物地理地区にありながら、黒潮(日本海流)の影響が小さく、汽水的性格が強い。秋から春にかけてズグロカモメやチュウシャクシギ等シギ・チドリ類が飛来し、東アジア地域における重要な渡りの中継地になっている。
- 保護の形態: 国指定鳥獣保護区特別保護地区
- 登録基準: 9つの選定基準の以下の項目を満たしている
 - ・基準2／絶滅の恐れのある種や群集を支えている湿地
 - ・基準4／動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地。または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地。
 - ・基準6／水鳥の1種または1亜種の個体群で、個体数の1%以上を定期的に支えている湿地。

肥前鹿島干潟のワイズユース

肥前鹿島干潟周辺の地域では古くからワイズユース(賢明な利用)が実践されてきました。それは大きな潮の干潟を知り尽くし利用してきた「待ち網」^{まちあみ}「棚じぶ」^{たな}など固有の伝統漁法が多く残っていることが示してくれています。明治時代から昭和初期まで続いた朝鮮半島西海岸への「朝鮮出漁」も大きな潮汐と干潟を熟知していたこの地域の漁師だからできたことでしょう。潟土を肥料として利用した「潟上げ」^{がたあげ}などもありました。そして現在、国内有数の海苔養殖が主要な漁業になっています。これらすべてが湿地(干潟)のワイズユースです。

今後は、肥前鹿島干潟の恵みを次世代に伝え、この地域の過去と未来をつなげるために、地域の人々、行政、関係団体等、多くの人々がそれぞれの立場で、肥前鹿島干潟に必要なことや、やりたいことを見つけ、みんなで目標を設定し、行動し、ワイズユースのさらなる実現と継続を目指していきます。

森 里 川 干 潟 海

命のつながり

肥前鹿島干潟の生物多様性

干潟には、川を通じて森や里から流れてくる土砂や枯れ葉、動物の死骸などの養分や、チッソやリンなど有機物が豊富に流れてきます。それらは一日2回の大きな潮の干満で海水と混ざり合い、プランクトンや貝類、海苔などの栄養分になったり、ゴカイ類、カニ類などのベントス(底生生物)の餌になります。ゴカイ類やカニ・エビ類などは、シギ・チドリ類などの渡り鳥や魚類の重要な餌になります。そして漁師さんに獲



渡り鳥は環境の指標です。

渡り鳥がやってくるのは、健康な干潟があって、餌になる生物が多くいるからです。干潟が埋め立てられて無くなったり、汚れると渡り鳥は来なくなります。

いつまでも渡り鳥がたくさんやってくる干潟を保全し次世代につなげていくことが大切です。

れた魚介類は私たちの食卓に並びます。

このように干潟では目に見えない小さな珪藻やプランクトンから、少し大きなカニやエビ類、もっと大きな魚や鳥、そして人間まで「食べる、食べられるの関係(食物連鎖)」によってつながっています。この食物連鎖が肥前鹿島干潟の多様で豊かな生態系を形成しているのです。

鹿島市にはラムサール条約湿地の「肥前鹿島干潟」以外にも水田や川、ため池など豊かな湿地環境がたくさんあります。



干潟のにぎわい



肥前鹿島の“まいうみ”と漁業

肥前鹿島沿岸の漁業

鹿島周辺は半農半漁の地域で、山間地や干拓地で農業を営み、「前海（まいうみ）」と呼ばれる海の沿岸部で漁業を行ってきました。干潟の海の漁獲のほとんどは貝類です。主にアゲマキガイ、ウミタケ、タイラギ、サルボウ、アサリなどです。昭和30年代には浜川の河口にカキ打ち小屋が無数に並んでいました。魚類ではムツゴロウ、ハゼクチ、ワラスボ、スズキ、メナダなどです。1960年代は14万トンあった漁獲量は、2000年代になって2～3万トンに激減しています。特にアゲマキガイは子どもたちも干潟でたくさん穫っていたのですが、最近ではまったく穫れなくなっているようです。近年の漁業は海苔の養殖が主流になっています。



アゲマキガイ



ワラスボ

干潟の海と海苔養殖

海苔養殖は、約300年前（江戸時代）の東京湾で始まったとされ、九州では明治時代に竹を立てるだけの養殖法が熊本県で始められました。佐賀県の有明海における海苔養殖は、明治38年熊本県で天然採苗した粗朶^だひびを当時の多良村（太良町）や大詫間^{おおだくま}（川副町）に移植したのが始まりだといわれています。有明海は大きな干満と流れ込む栄養豊かな河川に恵まれ、海苔の養殖に最適な地域でした。昭和29年に海苔養殖への転換が促進され、31年以降から飛躍的な進

歩を遂げ、38年頃から海苔摘み機や乾燥機などの機械化も目覚ましくなり、昭和41年には全国でも有数の海苔生産地域となりました。海苔養殖の本格化と共に有明海の漁業の姿は大きく変わりました。その後、新しい技術として冷凍網（海苔網を一時的に冷凍庫に保管）による養殖技術の革新でさらなる品質向上、生産量の拡大が起こり、本格的な養殖を始めて約20年で「佐賀海苔」は品質においても、収穫量においても日本一の海苔生産地域になりました。しかしその後、製造加工の省力化を目指す全自動乾燥機が多く導入され、設備投資の拡大による経営の悪化や、赤潮の発生による“色落ち被害”などの課題に直面しています。

海を育てる森づくり「海の森」事業

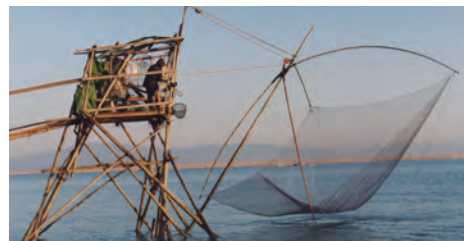
鹿島市では海と山とのつながりの中で、森林が水源の確保と海を浄化する働きに着目し、土や川を潤し、保水力や土砂の流出防止に高い能力を持つ落葉広葉樹の森づくりを目指すことにしました。有明海に流れ込む河川の上流域に落葉広葉樹を植林しようと「海の森」植林事業が平成7年に始まりました。例年3月中旬に植林を、8月上旬に下草刈りを、鹿島市環境衛生推進協議会が主催し、漁業者を中心とするボランティアの皆さんの協力を得て実施しています。



海苔養殖

干潟のめぐみと伝統漁法

この地域には、漁師さんこそ少なくなりましたが、資源を採り過ぎない、干潟ならではの伝統漁法がいくつか残っています。



棚じぶ（四つ手網）

海岸のすぐ近くの海上に櫓と小屋を組み、満潮時に小屋の中から「じぶ（特殊な四つ手網）」を上げ下げしてエビや魚を獲ります。30年ほど前までは有明海沿岸に数多くありました。



待ち網漁

海に入って逆三角形の網を浮かべて、満ち潮に乗って岸に近づいてくる魚を待って、魚が入ったら素早く上げます。メナダなどがよく獲れました。



むつかけ

はね板（潟スキー）に乗って5mほどの釣り竿の糸の先につけた4本の鈎^{かぎ}型の針で、干潟に出ているムツゴロウの少し先を狙って落とし、竿を引く瞬間にムツゴロウにひっかけます。



うなぎ塚

河口にすり鉢状の穴を掘って、上に石を載せて数日間、潮の干満を繰り返した後に石を取りのぞくと、その間に住み着いたウナギが獲れます。

他にも、底ものを獲る「くっぞこ漁」、竹の筒でムツゴロウを獲る「たかっぽ漁」やワラスボを引っ掛ける「すぼ掻き」などがあります。現在は無くなりましたが、潮が引く時に竹組に残った魚を獲る「竹あば漁」、石積みで造る「石あば漁」など干潟特有の漁法もありました。

昔の漁業とにぎわいの干潟

港のにぎわい

はましゆく 浜宿は1469年頃には港町(はまふな 津)らしき集落があったと考えられ、江戸時代には多良街道の宿場町として人口も多く「浜千軒」と呼ばれていました。鹿島藩領として「継場」「上使屋」「高札場」「番所」等が整備されており、多久出身の江戸後期の儒学者・草場佩川(くさば はいせん)の漢詩に「春風花満市 揺曳酒家旗 獲魚帰舟急 江口潮上時(春風に、花は町中に満ちている。酒屋の旗はたなびいていて、沖を見れば魚を獲った舟が急ぎ帰ってくる。入江はひたひたと潮が満ちあがってくる)」とあります。当時の漁港の賑わいが眼に浮かびます。明治以降は県下最大の漁港となり、朝鮮海峡や東シナ海への遠洋漁業も始まりました。酒造業や水産加工業も栄え鹿島市域の中心地として繁栄していました。現在も「酒蔵通り」や「はまししょうづまちなやまち 浜庄津町金屋町」等にその名残りを見ることができます。

この地域の漁業は、明治末期からカキ養殖が盛んになり、戦後は海苔養殖が漁業の中心になっています。

伝承文化

ラムサール条約では、湿地が大きな経済的価値をもつことにも触れています。

七浦地区には、雨乞いや豊漁、航海の安全を願う「沖の島まいり」が



竹の海苔ひび(昭和40年頃)



たかつぼ漁



海苔網の準備



北舟津(昭和50年代)・奥にカキ打小屋が並ぶ



リヤカーで貝類を運ぶ



アミ漁のようす



舟津地区の茅葺きの家並み(昭和40年代)



面浮立



沖の島まいり



潟上げ作業のようす



アゲマキガイを獲る“潟坊(がたぼう)”

あります。七浦海岸沖にある岩礁「沖の島」に“御髪大明神”を祭り、旧暦の6月19日の夜、月明かりと提灯に照らされて、多くの漁船が太鼓や鐘を鳴らしながら沖の島まで御参りに向う様子は幻想的です。他に米(水田=湿地)の豊作を願う面浮立などが多く伝承されています。

「潟上げ」

昔は潟(干潟の泥)を肥料や客土として利用していた時代がありました。干潟から泥を担いで上げる作業を「潟上げ」といい、「潟上げ音頭(新地節)」として、今でも唄い踊り継がれています。干潟と人々の密接なつながりが伝わります。

【潟上げ音頭(新地節)】

“新地土手から 小野島んば見れば
可愛い お春やんが潟いなる
来たるば寄かない 道ばたじゃるけん
冷や酒飲ません 爛つけて待っとる”

干潟で遊んだ思い出

干潟で遊ぶ子どもを「潟坊(がたぼう)」と呼びます。昭和30年頃、子どもたちは潮が引くと干潟へ出てたくさんアゲマキガイを獲りました。小遣い稼ぎにもしていたようです。アサリやカキ、ウミタケ、ハゼなども採れました。それらは家の食卓にも並びました。夏の干潟は子どもたちの身近な遊び場でした。

干潟にもう一度子どもたちが戻って来るともラムサール条約の願いです。

肥前鹿島干潟は渡り鳥の重要な渡来地

干潟は渡り鳥にとって重要な環境です。

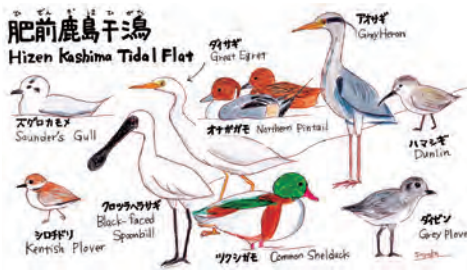
渡り鳥はエネルギー源として、干潟などの湿地の生物を食べ、非常に長い渡りをすることから、生態系保全の指標として重要な存在です。

寒い季節、北の地域では湿地が雪に覆われたり、川が凍ったりして餌が採れなくなるため、温かい南の地域の干潟や河口などにやって来て魚やカニなどを採って栄養を蓄えます。そして春になると繁殖をするために再び北の地域にもどって行きます。

しかし、世界各地で開発により多くの干潟が埋め立てられてしまい渡り鳥の生息環

境が失われていっています。そのため特に干潟に依存して生きているシギ・チドリ類の減少は深刻な状況です。

干潟は渡り鳥にとって、人間にとっての宿泊施設や休憩所のような重要な生息環境です。また長い移動ルートは、ひとつの地域や国だけで守ることはできません。渡り鳥を守るためには多くの国々との連携と協力が必要です。



肥前鹿島干潟は国内有数の渡り鳥の中継地・越冬地です。

有明海の広大な干潟には渡り鳥（渡り性水鳥）がたくさんやってきます。それは鳥たちの餌になるゴカイやカニ、魚、貝などがたくさんいるからです。肥前鹿島干潟には、干潟依存種のシギ・チドリ類では、主にチュウシャクシギ、ハマシギ、ソリハシシギ、アオアシシギ、ダイゼンなど約40種が飛来し、渡りの中継地・越冬地として利用します。カモ類では、ツクシガモ、ホシハジロ、マガモ、オナガガモ、ヒドリガモなど。カモメ類の絶滅危惧種のズグロカモメも多くやってきます。また東アジアで注目されている絶滅危惧種のクロツラヘラサギも2000年頃から増えています。

例えば、チュウシャクシギは、春～夏にシベリアのツンドラ地帯で繁殖をして、寒い



バードウォッチング

秋～冬は東南アジアなど温かい地域で越冬します。肥前鹿島干潟では、渡りの途中の4月～5月に1,000羽以上(1日)が飛来することもあります。数千キロの長い旅の途中の栄養補給と休息のために、干潟でカニやゴカイを採ったり、1本脚で眠ったりしている姿がよく見られます。



ハマシギの群れ

肥前鹿島干潟で出会える主な渡り鳥



チュウシャクシギ(シギ科)
下に曲がったくちばしで主にカニを採って食べます。春の渡りの時期に最も多く飛来します。



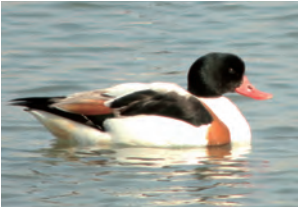
ソリハシシギ(シギ科)
少し上に反ったくちばしとオレンジ色の脚が特徴です。春・秋に群れで干潟にやって来ます。



ハマシギ(シギ科)
日本で最も多いシギで、群れで飛ぶ姿は壮観です。夏羽は胸の部分が黒くなります。



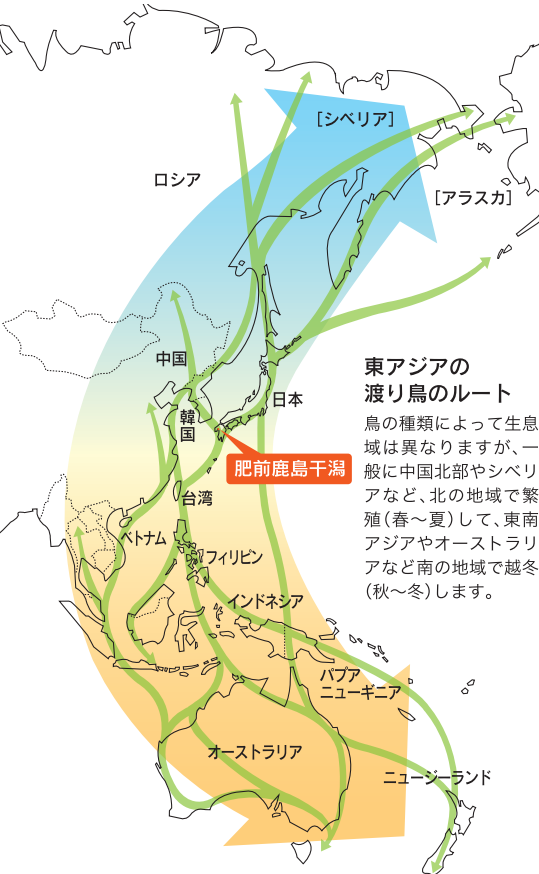
クロツラヘラサギ(トキ科)
黒くてヘラの形をしたくちばしが特徴です。首を振りながら餌を採る姿はとてもユニークです。



ツクシガモ(カモ科)
日本では有明海北部に多く飛来します。くちばしを干潟につけて表面の珪藻(ケイソウ)等を食べます。



ズグロカモメ(カモメ科)
夏になると頭が黒くなります。干潟に急降下をしてカニ等を食べます。冬に有明海に多く飛来します。



肥前鹿島干潟の生きもの観察

干潟の泥の中で暮らす生きものたちは、干潟や海水を浄化したり、魚や鳥の餌になるなど重要な役割をしてくれています。

春から秋の終わりまで泥干潟の賑やかな季節です。ムツゴロウやトビハゼ、ヤマトオサガニなどが干潟に出て餌を獲る姿が見られます。アシ原のそばにはシオマネキもたくさんいます。他にも有明海固有種の巻貝の仲間・ウミマイマイにも出会えます。



ムツゴロウ



トビハゼ



シオマネキ



ヤマトオサガニ



クロヘナタリ



ウミマイマイ

肥前鹿島干潟を守る人々

肥前鹿島干潟のラムサール条約登録を受けて、干潟のワイズユースを啓発・推進するために、漁協、商工会議所、観光協会、日本野鳥の会佐賀県支部、鹿島市などが定期的に会合を行い、協力して環境イベントや清掃活動などを行って、肥前鹿島干潟やラムサール条約の普及啓発活動を行っています。



海岸清掃

鹿島ガタリンピック／道の駅鹿島

「道の駅鹿島」は地元の新鮮な魚介類や野菜、特産品の直売所です。冬季にはカキ焼き施設もあり一年中賑わっています。また国際的に人気のある「鹿島ガタリンピック」の会場にもなっており、「ミニガタリンピック」や「干潟体験」、「棚じぶ漁体験」、「むっかけ体験」など、有明海ならではの様々な干潟体験が気軽に楽しめるメニューも充実しています。(要事前予約・有料)

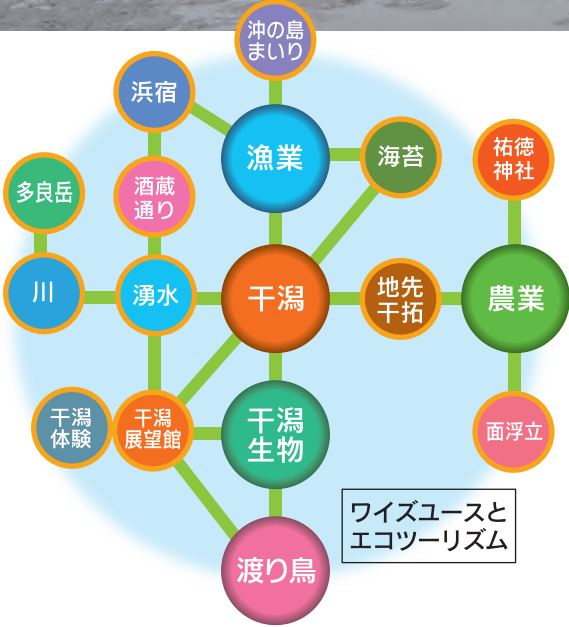
[問い合わせ] ☎0954-63-1768



干潟体験(生きもの探し)

干潟展望館(ミニ水族館)

干潟展望館では有明海の珍しい生きものを水槽で見ることができます。望遠鏡でバードウォッチングも楽しめます。さらにパネル展示も充実していて、スタッフが分かりやすく解説してくれるので、有明海の環境のことがとても良く理解できます。



鹿島ガタリンピック
七浦の広大な干潟で繰り広げられる泥んこ運動会。毎年数千人の参加者で賑わいます。



干潟展望館(ミニ水族館)
「道の駅鹿島」に隣接しています。有明海の生きものや干潟の魅力を知ることができます。



祐徳稲荷神社
日本三大稲荷のひとつ。年間280万人が参拝に訪れ、極彩色の社殿は鎮西日光とも称されます。



酒蔵通り(浜中町八本木宿)
浜宿は昔から酒造りが盛んで多くの酒蔵が今も続いています。年2回、酒蔵祭りが開催されます。

肥前鹿島干潟とエコツーリズム

エコツーリズムとは地域固有の自然環境や歴史文化などを観光客に紹介し、学びと体験と感動により、地域の価値や大切さが理解され環境や文化の保全、継承につながって行くことを目指しています。同時に地域の再発見や自信と誇り、活性化へとつながります。

肥前鹿島干潟は、環境や生きもの、生業、人の暮らし、歴史、文化などがワイズユース(賢明な利用)でつながっており、現在も継承され、保全されている“宝もの”がたくさんあります。

なりわい